

# ポルトガル語からの外来語

馬場良二

国語学会編の『国語学辞典』の「ポルトガル語」の項を見るとポルトガル語についての記述があり、最後に、「日本語にはいったポルトガル語も少なくなく、例えば、次のようなものがあげられる。パン、コンペイト、マルメロ、フラスコ、ビードロ、ボタン、カップ、マント、ジバン、ラシヤ、シャボン、カルタ、タバコ、サフラン、カナキン、カステラ、コンパス、メリアス、サラサ・オルガンなど。」とある（「サラサ」の次の「・(中黒)」は原典のまま：馬場）。これらの語は本当にポルトガル語から来ているのだろうか。調べてみた。

これらのうち、いくつかの語は表記が一般的でなかった。「コンペイト」ではなく「コンペイトー」であり、「メリアス」ではなく、「メリヤス」が一般的なようだ。以下、この表記にしたがい、パン、コンペイトー、タバコ、ジバン、カップ、ラシヤ、サラサ、カナキン、ボタン、フラスコ、ビードロ、シャボン、カルタ、オルガン、マルメロ；マント、メリヤス、サフラン、コンパス、カステラ（食べ物、嗜好品、衣類、布地、その他の物品；そして、ポルトガル語由来とは考えられない語）の順に見ていこうと思う。

## 1. 食べ物、嗜好品（パン、コンペイトー、タバコ）

『広辞苑』には、

**パン**【pão ポルトガル・麵麩・麩包】小麦粉（またはライ麦その他の穀粉）を主原料とし、これに酵母種・食塩・砂糖・脂肪などを加えて水でこね、発酵させてから焼き上げた食品。

**コンペイトー**【confeito ポルトガル】（「金米糖」「金平糖」と当てる）菓子の名。氷砂糖を水に溶かして煮詰め小麦粉を加えたものに、炒った芥子（けし）を種に入れ、かきまわしながら加熱して製する。周囲に細かいいぼ状の突起がある。

**タバコ**【tabaco ポルトガル・煙草・莨】（アメリカインディアンの土語からか。一説に西インド諸島ハイチの土語）①ナス科の一年生作物。南アメリカ原産。

スペイン人によりヨーロッパに伝えられ、始めは観賞用に栽培されたという。わが国には一六世紀に九州へ渡来。関東北部・九州南部などが主産地。タバコ属の野生種は数十種あるが、栽培種は数種。品種は極めて多い。アメリカ・中国・インドその他に広く栽培される。葉はニコチンを含み、加工して喫煙用とする。②タバコの葉を乾かして発酵させ、喫煙用に加工したもの。葉巻・巻煙草・刻み煙草・嗅煙草・噛煙草などがある。

という記述がある。「コンペイトー」は芥子の種を入れた菓子とあり、「タバコ」はアメリカ・インディアンの土語のことばが語源ではないかとある。

それぞれの項にある *pão*、*confeito*、*tabaco* をブラジルで編まれた、現代ポルトガル語の辞書 NOVO DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESA で調べてみた。

**pão** [Do lat. *pane*.] Alimento feito de massa de farinha de trigo ou outros cereais, com água e fermento, de forma em geral arredondada ou alongada, e que é assado ao forno.

[ラテン語の「pane」から] 小麦、その他の穀物の粉と水、酵母を練ったものから作られた食品で、普通、丸いか長い形をしていて、窯で焼かれたもの。

ポルトガル語の「pão」の語源はラテン語の「pane」からだそうだ。

**confeito** [Do lat. *confectu*, 'preparado', pelo it. *confetto*.] Semente ou pevide coberta de uma camada aderente de açúcar.

「用意された」という意のラテン語「confectu」から、イタリア語の「confetto」を経て] べたべたした砂糖の層におおわれた種。

とある。芯に植物の種を使った砂糖菓子である。

*tabaco* の記述には、語源について [Do taino *tabaco*, que designava o instrumento em forma de Y com que os índios fumavam.] とあり、「タイノ族の「tabaco」からで、これはインディオが吸うときに使った Y 字型の道具の名称だ」ということである。

## 2.衣類、布地(ジバン、カッパ、ラシャ、サラサ、カナキン)

『広辞苑』の「ジバン」の記述は、

**ジバン**【gibão ポルトガル・襦袢】肌につけて着る短衣。はだぎ。垢取。汗取。じゅばん。

である。そして、NOVO DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESA の記述は、

**gibão** [Do it. ant. gibbone] Vestidura antiga, que cobria os homens desde o pescoço até à cintura.

とあり、語源を古いイタリア語の「gibbone」だとしている。語義は、「昔の衣類で、人の首から腰までをおおった」とある。「昔の衣類」とあるところを見ると、現代では「gibão」ということは自体あまり使われていない可能性がある。もしかしたら、日本での「襦袢」のほうがよく使われているかもしれない。

**カッパ**【capa ポルトガル・合羽】①雨天の外出に用いる外套（がいとう）の一種。初めポルトガル人の外套を模し、衣服の上に広くおおうように製したもの。羅紗（ラシャ）・綿布・桐油（とうゆ）紙などで作り、袖をつける。元来、袖はなく、坊主合羽・丸合羽といい、木綿のを引回しという。また長さにより長合羽・半合羽がある。②荷物・駕籠（かご）などの雨覆いに用いる桐油紙。

とある。ポルトガル語の「capa」の第一義は、『広辞苑』の①と同じで「Peça de vestuário usada sobre toda a outra roupa a fim de protegê-la, ou proteger quem a veste, contra a chuva.（雨から服を守るため、あるいは、その服を着ている人を守るために一番上に着る衣類）」であるが、ポルトガル語ではもっといろいろな意味がある。人の体や荷物（『広辞苑』の語義の②を参照）だけでなく、本のカバーやレコードのジャケット、CDのケース、ソファーにかぶせた布など、中身を保護するための覆いならすべて capa である。

「ラシャ」の記述は、

**ラシャ**【raxa ポルトガル・羅紗】羊毛で地（じ）の厚く密な毛織物。室町末期頃に輸入され、陣羽織・火事羽織などに用いられた。今は毛織物全般のことをもいう。

であるが、ポルトガル語の辞書によると、「Pano antigo, grosseiro, de algodão.」で、羊毛ではなく「木綿でできた昔の分厚い布」である。キリシタンの時代、大名たちがこぞって身につけた舶来の品々は羊毛だったのだろうか、木綿だったのだろうか。

『広辞苑』の「サラサ」の記述には、「もとジャワの古語セラサからか。ポルトガル語を介して、一七世紀初め頃までに伝来」とあるが、NOVO DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESA には、「Do mal. Sarásah(マレーシア語の Sarásah)」とある。調べてみると、ジャワの言語とマレーシア語とは同じか、あるいは、非常に近い言語のようで、二つの記述に矛盾はないようだ。

「カナキン」の記述は、

**カナキン**【canequim ポルトガル・金巾】堅くよった綿糸で目を堅く細かく薄地に織った綿布。カネキン。

であり、NOVO DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESA には記述が見られなかった。ポルトガルのポルトガル辞書 DICIONÁRIO PRÁTICO ILUSTRADO をひくと、

**CANEQUI ou CANEQUIM** Tecido de algodão da Índia.

とある。第一の見出しが「カネキ」で、次が、「カネキン」となっている。「カナキン」はない。「カネキン」が、日本にはいつてからなまったのだろうか。語義は「インドの木綿の織物」とある。「canequi」、「canequim」という語もインドからポルトガル語への借用語なのかもしれない。

「ジバン」はその物とことばとがそのまま日本にはいつてきたようであるが、「カッパ」は「capa」の持つ語義の一部だけが、「ラシャ」はポルトガル本国とはことなる物として伝わっ

たようである。

### 3. その他の物品(ボタン、フラスコ、ビードロ、シャボン、カルタ、オルガン、マルメロ)

私たちの日常生活に欠かせない「ボタン」、その「ボタン」の『広辞苑』の記述は以下のとおりである。

**ボタン**【botão ポルトガル・鈕・釦】衣服などの合わせ目を留めるもの。貝殻・金属・セルロイド・ガラス・合成樹脂などでつくる。

ポルトガル語源であることが明記されている。NOVO DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESA の botão の項には 16 もの語義がある。そのうちの 4 番目の記述は以下のとおりである。

**botão** [Do fr. ant. boton, hoje bouton.] 4. Pequena peça, quase sempre arredondada, que se usa para fechar o vestuário, fazendo-a entrar numa casa ou presilha, e também como ornato.

[古フランス語の「boton」から。今日では「bouton」] 4. 小さなもので、ほとんどの場合丸く、ボタン穴やループを通して、衣類を閉じるときや飾りとして使う。

日常的ではない「フラスコ」には、

**フラスコ**【frasco ポルトガル】①西洋風の首の長いガラス製の徳利。玻璃壺。②化学実験器具の一。硬質ガラス・耐熱性ガラスで作った首の長い徳利状の容器。

という記述がある。その「frasco」をポルトガル語の語源辞典 DICIONÁRIO ETIMOLÓGICO NOVA FRONTEIRA DA LÍNGUA PORTUGUESA で調べると、語源は後期ラテン語の「flasco」であるとしている。『羅和辞典』には「flāscō 酒を飲む器、フラスコ」とあるが、AN ELEMENTARY LATIN DICTIONARY には「flasco」という見出し語がない。多分、「flasco」は古典ラテン語ではなく、民衆の使った俗ラテン語だったのであろう。

一方、NOVO DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESA には、

**frasco** [Do gót. \*flaskô.] Garrafa pequena, de vidro, de cristal ou de barro vidrado, para medicamentos, perfumes, et.

[ゴート語から。(仮説としての語形は)「flaskô」] 薬物や香水などのためのガラスや水晶、上塗りをかけた陶器でできた小さな瓶。

とある。もともとはガラス以外の素材の瓶も「frasco」と呼ばれたようである。「vidro」がポルトガルから伝わると同時に「frasco」も伝わり、素材がガラスに限定されたのだろう。ポルトガルへはゴート語からはいったという記述は DICIONÁRIO ETIMOLÓGICO NOVA FRONTEIRA DA LÍNGUA PORTUGUESA とことなる。

その「ビードロ」の記述は、

【vidro ポルトガル】 ガラスの異称。室町末期、長崎に渡来したオランダ人が製法を伝えた。玻璃（はり）。

で、「オランダ人が製法を伝えた」とある。しかし、「vidro」は間違いなくポルトガル語で、

**vidro** [Do. lat. vitru.] Substância sólida, transparente e quebradiça, que se obtém pela fusão e conseqüente solidificação duma mistura de quartzo, carbonato de cálcio e carbonato de sódio.

[ラテン語の「vitru (ガラス)」から] 硬くて透明、壊れやすい物質で、石英と炭酸カルシウム、炭酸ナトリウムの混合物の融合とその結果の凝固によってできる。

ポルトガル語は直接的に俗ラテン語から派生したのだが、その俗ラテン語の有声閉鎖子音は古典ラテン語の無声閉鎖子音と対応する。この場合は、「vidro」の [d] が古典ラテン語の [t] に対応している。製法を伝えたのはオランダ人だったのだろうが、その名称はポルトガル語からはいったということか。

今は「シャボン玉」という複合語でしか生き残っていないが、いつの時代かには石鹸のことを「シャボン」と言った。ポルトガル語の「sabão」がもとである。NOVO

DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESA の記述は以下のとおりである。

**sabão** [Do lat. sapone.] Produto detergente constituído de sais de sódio e de potássio, de ácidos graxos, e que serve para limpeza em geral.

[ラテン語の「sapone」から] ナトリウム塩、カリウム塩、脂肪酸からできているもので、洗浄、清潔一般のために使われる。

「カルタ」もポルトガル語起源で、NOVO DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESA には「(カード) 遊びのための(トランプやタロットなどの) 一組のうち一枚一枚」のほか「手紙」「証書」「(レストランの) メニュー」「地図」「法規、憲法」など、八つもの意味が書いてある。そもそも「carta」は英語の「card」と同じ語源で、ペラペラしないしっかりした材質の「紙片」のことらしい。「マグナ・カルタ」はラテン語だし、病院の「カルテ」はドイツ語が起源であるが、どれももとは同じ「ペラペラしないしっかりした材質の紙片」である。

『広辞苑』の「オルガン」の記述は、

**オルガン** [orgão ポルトガル] 鍵盤楽器の一。風を送って音を出す。現今用いるものにリード・オルガンとパイプ・オルガンと二種ある。風琴。

で、楽器を意味するだけだが、NOVO DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESA の「orgão」には六つの語義がある。もともと「orgão」には「動植物の器官」「組織」などの意味があるからである。六つのうちの5番目の語義が楽器のオルガンで、

Grande instrumento de sopro, composto de tubos afinados cromaticamente, alimentados por um sistema de foles, e acionados por meio de um ou mais teclados manuais, além de uma ou duas pedaleiras. É empregado especialmente como instrumento de música religiosa.

半音階に調律された管によって構成された大きな吹奏楽器で、ふいごの機構によって維持される。一つあるいはそれ以上の手動の鍵盤、そして、一つか二つのペダルによって操作される。とくに宗教音楽のための楽器として用い

られる。

とある。日本語の「オルガン」とはことなり、ポルトガル語では「パイプオルガン」しか示さないようである。

『国語学辞典』には、ポルトガル語からの外来語として「マルメロ」があったが、一般的な語ではない。聞いたことがあっても、何のことはよく分からないのではないだろうか。『広辞苑』によると、

**マルメロ**【marmelo ポルトガル・木瓜】バラ科の落葉高木。中央アジアの原産。高さ約5メートル。葉は楕円形、裏面に綿毛を密生。春、白または淡紅色のボケに似た五弁花をつける。果実は黄色で円く、外面に綿毛を被り、甘酸っぱくて香気があり、普通、砂糖漬として食用。セイヨウカリン（単にカリンとも）。漢名、楡椀。

とあり、果物の一種であることが分かる。NOVO DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESAにはギリシャ語の μελιμηλα からラテン語にはいって「melimeli」となり、そこからポルトガル語の「marmelo」となったとある。

「フラスコ」は化学の実験器具の名称として生き残り、「ビードロ」は日常使う語からは消えてしまった。

#### **4. ポルトガル語由来とは考えられない語**

『国語学辞典』では、「マント、メリヤス、サフラン、コンパス、カステラ」がポルトガル語由来の外来語として上げられているが、これらはポルトガル語ではない。

『広辞苑』にあるとおり、「マント」はフランス語の「manteau」であり、「サフラン」「コンパス」はオランダ語の「saffraan」、「kompas」である。

『広辞苑』で「サフラン」の項を見ると、

**サフラン**【オランダ・洎夫藍】アヤメ科の多年草。南ヨーロッパの原産。球茎をもち、細長い葉を出す。一〇月頃、淡紫色六弁の花を開く。花柱は三裂して糸状、赤色。紀元前一五世紀ごろ、すでにこれをとって利用した。薬用・染色用。サフランの名は本来この生葉の名。漢名、番紅花。

とあり、オランダ語起源となっている。しかし、「saffraan」を『オランダ語辞典』でひくと、



参考として「平賀源内は「泊夫藍 ラテイン語サフラン、番紅花」を著者『物類品隲（ぶつるいひんしつ）』（1763）に掲げた。」とある。確かに、『羅和辞典』には、「safranum」という見出し語があり、「サフラン」とある。一方、THE OXFORD ENGLISH DICTIONARYには、「saffra(a)n」という見出し語があり、オランダ語の「zaffraan（黄色）」を語源とする Afrikaans（南アフリカで用いられるオランダ語を根幹とした混合語）だとある。

ポルトガル語の辞書には、どの辞書にも「saffraan」かそれに近いつづりの見出し語はない。ラテン語か Afrikaans かオランダ語かということになるが、少なくとも日本にはいつてきた「サフラン」はオランダ語からであろう。

「メリヤス」という表記は誤りのようである。どの辞書を見ても「メリヤス」しかない。『広辞苑』にあるこの「メリヤス」の記述を見ると、

**メリヤス**【medias スペイン・meias ポルトガル・莫大小・目利安】綿糸・毛糸などを機械を用いてよく伸縮するように編んだもの。表と裏と編み目が異なる。

とある。スペイン語の「medias」、あるいは、ポルトガル語の「meias」から来ているということだ。ポルトガル語の「meias」がなまって「メリヤス」になったと考えることもできるが、音声学的に言うと「メリヤス」に近いのは、スペイン語の「medias」のほうだろう。[d]の音も「リ」の子音も舌尖を使う音で「メディヤス」が「メリヤス」になるのは容易だからである。なお、スペイン語の「medias」もポルトガル語の「meias」もその意味は「靴下」である。日本語では靴下そのものではなく、その素材である布地のことを意味するようになっている。

ポルトガル語からの外来語として有名な「カステラ」だが、『広辞苑』には、

**カステラ**【Castilla】（もとカスティリアで製出したからという。オランダ人から長崎に伝えられた）小麦粉に鶏卵と砂糖・水飴とをまぜて焼いた菓子。カステーラ。

とある。Castillaは現在のスペイン国の基となった王国の名でスペイン語であるし、伝えたのはオランダ人だとある。もしかしたら、日本にカステラを伝えたのはオランダ人ではなくてポルトガル人かもしれないが、ポルトガルには「Castilla」という菓子も語も存在し

ない。

以上、「サフラン、コンパス」はポルトガル語からの外来語とは考えにくいし、「マント」は明らかに違う。「メリヤス、カステラ」もポルトガル語からの外来語の例として『国語学辞典』にのせるのにはふさわしくない。ポルトガル語とスペイン語とは系統的に非常に近い言語であり、外来語がどちらから来たのかを判別するのはむずかしいことがある。もともとオランダ語だとしても、ポルトガル人との交易の過程ではいつてきた語もあるかもしれない。ポルトガル語の *gibão* から来ている「ジバン」も、もとは古いイタリア語だというし、日本語にはいつてきた語の由来を判断、判定するのは簡単なこととは言えない。だから、もう少し慎重に語を選んでほしいものだ。

この一文は、熊本県立大学学長特別交付金による学際型研究「天草プロジェクト」の助成を受けた研究の一部である。

### 参考文献

1. 国語学会『国語学辞典』1955、東京堂出版
2. AURLIO BUARQUE DE HOLANDA FERREIRA, NOVO DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESA, 1986, EDITORA NOVA FRONTEIRA S. A., Rio de Janeiro, Brasil
3. DICIONÁRIO ETIMOLÓGICO NOVA FRONTEIRA DA LÍNGUA PORTUGUESA, 1982, Editora Nova Fronteira
4. DICIONÁRIO PRÁTICO ILUSTRADO, 1976, Lello & Irmão-Editores
5. 『現代ポルトガル語辞典』1996、白水社
6. AN ELEMENTARY LATIN DICTIONARY, 1891, Oxford University Press
7. 『羅和辞典』1952、研究社
8. 『西和辞典』1958、白水社
9. 『オランダ語辞典』1994、講談社
10. THE OXFORD ENGLISH DICTIONARY, 1989, Oxford University Press